

アメリカ科選択と中屋先生との思い出

第20期 若松 修一（1972年卒業）

私が通っていた田舎の県立高校では当時としては珍しく教職員の中に東大卒の先生が一人おり、彼が担当する教科は物理でした。しかし、その先生の教え方がどうしても私の性に合わず、毎時間非常に困惑させられたのです。

ところが、受験雑誌に理系進学を目指すなら、たとえ医・薬学系でも物理と化学は勉強して受験科目に選択すべきであると書いてあったのです。一年生次に履修した生物はまあまあ成績でしたので、それと二年生次以降履修する物理と化学のうち化学を選択すればよいだろうと考えていた私は少し焦りました。物理を選択すべきとは全くもって衝撃的な意見で、苦手な先生が教える科目を私は重荷に感じていました。それでも半年ほどは何とかモノにしようと努力はしたのですが、どうしても物理が向いてなさそうに思え、二年生後期には終に理系進学そのものを断念してしまいました。もとを正せば、漫画『鉄腕アトム』の影響からか白衣姿の研究者が格好良く思え、将来は漠然と『白衣を着た科学者にでもなりたい』と思っていたのですが、「白衣」と縁を切ることになったわけです。

一方、社会科は当時、国立一期校文系の大半が社会系2科目（理系は1科目）を選択受験するのが決まりでしたので、一年生次に習って得意な科目の一つになっていた地理と二年生次以降に習う日本史で受験しようかと考えていました。ところがこちらも、東大進学者向け通信添削の『学生文化指導会』の冊子に某先輩指導員が『東大文系に進学を志すなら世界史を学ばなければ後悔する』旨の意見をコラムに書いていたのです。それをたまたま読んで信じてしまった私は、それまでカタカナ表記される外国の地名・人名がどうしても馴染みが薄く、取っ付き難い科目の一つと思い込んでいた世界史を、地理の選択を諦めて日本史と併せて受験科目とするように決めたのです。幸いなことに世界史担当の教諭はシベリア抑留から奇跡的に生還された経験を持たれ、それでいて穏やかで真摯な性格の持ち主で、時には冗談をも交えてくれる老練な先生でした。それで、私ばかりか多くの生徒から慕われていた方でした。教師との相性で受験科目や専攻を安易に選んではいけないとは思いながらも、当時の私はあまり悩むことなくそのように決断してしまった一人でした。

受験一年目は残念ながらサクラ散る結果でしたが、二年目には何とか文Ⅲに合格することができました。入学したものの、半年も経たないうちに医学部に

端を發した東大闘争（紛争）が教養学部まで波及し、ストライキを決議・実行したため、一年前期のテストが行われないうままその後一年半ほど授業がない状況が続きました。その間私はどこに進路を定めたら良いものか見当がつかず、全く暗中模索の状態でした。悩んだ末に第二次世界大戦に負けた日本国民の一人として将来生きて行くのにどうしても逃れられないのは、他にもないアメリカを中心とする国際関係なのではあるまいかと認識し、それなら在学中にせめてその基礎だけでも学べる路に挑んでみようという思いに至りました。高校で学んだ地理や世界史も活きるだろうし、しかも身近な駒場の教養学科、その中でも国際関係論かアメリカ科コースかということになりました。

結果としてアメリカ科を選んだ理由を記します。定員の比較的多い国際関係論コース（中規模授業）に進めば、私のように怠惰に走りやすい者はその中の一人として安易に埋没し兼ねない、それは避けよう、それよりセミナー形式で少人数のアメリカ科でしごかれる立場に敢えて自分を置いて鍛えて貰おうと決断したわけです。友人の中には「何も敢えて『反動教授』がいるような所を選ばずとも…」と忠告なのか、または一種の慰めとも聞こえるようなことを私に向けてきた者もいました。

進学内定後の1970年5月（二学年次後期）にアメリカ史とアメリカの地理を優先すべき専門科目として先ず受講させられました。地理の講義は別として、中屋健一先生が教えるアメリカ史の講義は先輩諸氏から忠告を受けていた通り、それは『聞きしに勝る』厳しいものでした。アメリカの大学の様式そのままだと噂には聞いてはいましたが、週に2コマある授業には毎回事前に渡される三冊の予習用副読本を読んで比較・要約するアサインメントが出されました。受講者は皆、前夜はほとんど徹夜状態でそれをこなし、授業開始時間前に必ず全員が着席し待機するのは当然のこと、授業開始後10分間には毎回アサインメントに関連する小テスト、更には受講中に厳しい質問が飛ぶといった内容でした。同期進学内定者9名の私たちに加え国際関係論からの2名（共に19期生）、他学部からの1名の12名で授業を受けていましたから、いつ先生から質問が飛んでくるか終始緊張状態に置かれました。先輩からは「授業中に居眠りでもしていると灰皿や黒板拭きが飛んでくるぞ！」と脅されていましたが、学園紛争明けだったこと（？）と先生ご本人が翌71年3月の定年退官を間近に控えておられて、やや人柄が丸くなっていた所為なのか（否、多分私たちには余り期待されていなかった所為だと思う）、灰皿も黒板拭きも飛んで来た記憶はありません。1～2年上の先輩からはアメリカ史と地理の授業は二学年後期に受講するので通常なら冬の寒さに耐えながら毎回徹夜に近い予習に追われるのを、

学園紛争があつて受講時期が半年ほどズレて、私たちの場合は夏季に徹夜する巡り合わせになっただけでも幸運だよ！と言われたのは今でも記憶に残っています。それでも先生から大声で注意喚起されたり、小さなチョークくらいは飛ばされたことがあつたかも知れません

アメリカ史の講義では人一倍厳しい中屋先生もその一方で、授業の合間や学期末の休暇には自ら企画された林間合宿や冬のスキー教室に連れて行ってくれて、その折先生が見せてくれる手料理の振る舞いや、（授業とは対照的に）慈悲に溢れた校外指導をしてくれました。

「硬軟両様」のご指導を中屋先生から受けた私たちはその共通体験から、皆の間に強い仲間意識が生まれ、しかも半世紀を経てもその楽しい人間関係が今なお続いています。私の場合も進学が内定した直後は一時期後悔したことがありますが、短い専門課程の期間に中屋先生から「アメリカ史は体力と気力で学ぶ」



左から藤田先生、中屋先生、亀井先生、宮氏(19期)、波多野氏(21期)
Aug., 1970 新潟県妙高市赤倉にて

指導を受けられたことで十分に充実した学生生活を過ごせたと今では感謝しています。時間厳守と体力・気力で勝負の精神は実社会に出てからも仕事の遂行などに時として役に立ったように思えます。

また、受験や進路の選択時から既に半世紀が過ぎた現在から振り返っても、受験科目の一つに世界史を選択し、それが凶らずも当時少し悩んだとはいえ、世間にはまだ名前が売れていなかった教養学科アメリカ科への進学と繋がりました。アメリカ科は地域研究と言う新しい学究方法、アプローチの仕方が採用された、とてもユニークな学科でしたので、私もそこで学べたことが今でも誇りに思えてなりません。

1972年3月に私はアメリカ科を卒業して住友化学に就職しました。当時住友グループ企業の主な活動の中心は関西でしたので、本社（大阪）勤務となりましたが、着任してみると周りに同期生はおらず、実家がある東北からも遠く離れて何とはなく都落ちした気分でした。

会社員となっても、自分の語学力アップを図り職務に生かせればと考え、奨学金を取得して米英大学への留学をめざしてみました。当時はまだ貰える給料も安く、為替も1米ドルが300円台、1英ポンドが800円台という時代で米英の大学授業料を若い会社員が個人で支払えるわけがありませんでしたので、イースト・ウエスト・センターなどの奨学金獲得をめざして、東大大学院に進んでいた同期生と並んで留学試験を2回ほど受けたのですが、会話が不得意な私の場合最終面接までクリアできずにいました。

一方で、私が入社した1972年の9月には田中角栄総理の電撃訪中で日中の国交が正常化され、それがきっかけで日本には第一次中国・中国語ブームが到来し、会社も他の企業に遅れまいと中国語研修に社員を送ることがありました。私もその一人に選ばれて1年ほど東京で研修を受けていました。その研修先で、中国語なら奨学金なしでも資金的に十分な海外留学先があることを知り、シンガポールの南洋大学^{注1}へ留学することにしました。当時社員の留学制度をまだ制度化していなかった会社もシンガポールで自社が中心となって石油化学コンビナート建設の事業化計画を持っていたので、将来それへの貢献もあり得るということが理由の一つとなって同国への中国語研修者派遣を会社が公認せざるを得なくなっていました。

当時の中華人民共和国（大陸中国）はまだ文化大革命の末期でコテコテの共産主義、閉ざされた大国でした。それ故、単に語学学習のための留学は民間の日本人には許されておらず、台湾留学を選択すると将来（旅券に台湾への渡航歴が残ることから）大陸中国へのビジネス渡航が禁止され兼ねないとのまことしやかな噂が流れていた時代でした。一方、シンガポールは第三の中国とも呼ばれるように、国民の四分の三が華僑で占められ、先祖の墓がある大陸中国とそれと敵対関係ながら自由主義側の台湾、その両国と等距離に外交関係を結んでいました。そうした背景からシンガポールに中国語の学習箇所を求めて、ソ連（ロシア）、米国、日本、カナダ、英国、西独、インドネシア、タイなどの各国から多数の留学生が集まるようになっていました。日本からは新日鉄、トヨタ自販、大和銀行、日商岩井（以上4社は旧社名）、三井物産、丸紅、東芝などの企業からの派遣留学生、それに大学や企業を自主的に一時休学・休職しての自費留学生も数多くおりました。動機はそれぞれ別にしても皆中国語への向学心に燃えて勉学に勤しんでいたのです。

その中で多数を占めたのはソ連からの国費留学生（多分にKGB要員か？）でした。彼らには見張り役の共産党風紀委員（私が在学時には小太りの中年女性でした）が付いていて常に単独行動は禁止、2名以上の複数で行動、時折風紀委員引率の下、大挙して市内の大使館へ出かけるなどしていました。民間レ

ベルで留学していた私たち日本人が、あるとき大学の南側に広がり、東屋が散在する中国式回廊庭園での野外立食パーティー開催を企画して各国からの留学生にも参加を呼び掛けたことがありました。すると、ソ連側は先ず風紀委員に如何なる内容でパーティーを開くのか説明しないと誰一人として参加が許されない有様でした。一方、米国からの留学生の中にはC I A関係者が混じっていたのですが、そこは米国人、彼らはアッケラカンとした態度でビールが飲めるならいつでもどこでも歓迎の様子で気軽にやってくるといった調子でした。そこは正に未来の対中国諜報活動要員の卵が同じ屋根の下、呉越同舟で互いに切磋琢磨して学ぶ、当時の世界情勢の縮図の一つが表れていたような学び舎でした。

そんな実社会に出た私が、アメリカ科の先輩諸氏ともいつも共通して話題にできる中屋先生にゆっくりお会いできたのは、思いもかけずシンガポールで、そこへ留学中の1977年12月4日～6日の3日間でした。

先生はオーストラリアで開催される国際ペンクラブ大会へ日本代表として出席される途次、わざわざシンガポールに立ち寄ってくださったのです。

その折、私は先生から初めて第13期卒で当時三菱商事シンガポール支店勤務中の河村一雄氏に引き合わせて頂きました。当時の通信手段と言えばまだ携帯電話もインターネットも無く、郵便、固定電話、電報、(まだファクシミリもなく)TELEXの時代で、自分がどうやって先生のシンガポール立ち寄りの件を直近で知って来星^{注2}初日の12月4日に宿泊先のオーチャード通りにあるマンダリンホテルへ駆け付けることができたのか、いまだに判然としません。想像するに河村先輩から住友化学滞星^{注2}駐在員経由、大学学生寮にいた私に電話連絡があったのだと思います。



左端が河村先輩、左から
3人目が中屋先生、
右端が筆者、
Hotel Equatorialにて
Dec. 05, 1977

当時私は一旦社会人とはなったものの、まだ独身でシンガポール本島南西端に位置する南洋大学構内の学生寮住まいで、同大は市の中心部から遠いこともあって駐在員とも普段疎遠で、仕事からは完全に解放され気楽な身分でした。

中屋先生が滞星^{注2}中は昼間業務に忙殺される河村先輩に代わって、三菱商事支店から運転手付きで拝借した社用車にて、時間的に自由な私が中屋先生を島内中案内して回りました。多数のコンテナ船と陸揚げされた無数のコンテナ群とが並ぶ港湾沿岸、タイガーバームガーデン（ハウパーヴィラ）それにビジネス・金融街、無数のタグボートが行き交うシンガポール川河口付近、（当時の小さい）マーライオン像などの主な観光スポットへお連れし、案内しました。それは12月6日夕刻に当時の国際空港、Paya Lebar Airport からオーストラリアへ出発される最終日まで続きました。ほぼ丸2日間、私は先生に付きっきりで過ごす、またとない機会を得たのでした。

先生は過去、同盟通信社勤務の日中戦争当時に中国・香港やフィリピンに駐在されていたご経験をお持ちでしたが、シンガポールへの訪問は初めてのご様子でした。また、当時シンガポール航空キャビン・アテンダントのサービスが世界的に上位と話題に挙がってきていた頃で、一度それを味わってみたい気持ちもあって、オーストラリアへの往復に初めてシンガポール航空機を選択し、途上シンガポールでのストップオーバーを思い立たれたような発言をされていたかに記憶しています。当時の在星^{注2}関係者からしますと良くぞ思い立ってシンガポールへお立ち寄りくださいました、との思いでした。観光案内の間、今から思えばかなりの長時間先生と二人だけの時間が車中や立ち寄ったレストランなどであったはずなのですが、私が先生に何をどの程度説明し、互いに何を話したのかは残念ながら覚えていません。その時、先生は日中戦争当時の中国やフィリピンと似たような光景、あるいは面影をシンガポールに見つけ、見つめておられたのか、または駐在中のご苦勞を思い出し、感慨に耽っておられたのかは解かりませんでした。唯、私の記憶にはほとんどの箇所で終始無言でジーと遠方を眺めておられたご様子が印象として残っています。



当時の私は学生時分に戻った気持ちで、軽装で先生をお迎えしていましたのに、先生はかつてフィリピンの熱帯雨林気候体験者であったにも拘わらず、しかも旧交を温める会食でお会いするのは私たち若輩な教え子ばかりなのに、あの常夏気候のシンガポール滞在中、

左は中屋先生と筆者、Tiger Balm Gardenにて
Dec. 06, 1977

陽光ギラギラで多湿な日中時間帯に市内観光される折でも背広上下にネクタイを締められ矍鑠たるお姿で過ごされたのには真に感服しました。

その思い出も色褪せない1981（S56）年4月に、当時世田谷にあった中屋先生のご自宅へ翌5月にシンガポール石化事業建設の一員として再度同国へ赴任する旨をお伝えするためにご挨拶に伺いました。それが私にとって中屋先生にお目にかかれた最後でした。

注¹：南洋大学 Nanyang University とは第二次世界大戦後にマレーシア・シンガポールや東南アジアの華僑たちが資金を出し合ってシンガポールの南西部に創建（1956年開学）した地域唯一の北京語による大学教育機関でした。中国語使用なので、旧マラヤ共産党や親大陸派、それに近い学生運動者の拠点になり兼ねないことを恐れたシンガポール政府は私立の同大を1980年に接收し、英語教育の国立シンガポール大学と合併、一時期同大の1 College、Nanyang Technological Institute [NTI]へと再編、更に1991年には英語教育の国立、南洋理工大学 Nanyang Technological University [NTU]へと改編しました。名称は理工科系ですが文系も含む5つの College と付属の研究施設などから構成され、下部に大学学部に対応する複数の School が存在。近年その中の一つ、Nanyang Business School の修士課程に経営学（MBA）コースがあってそれが世界的に高い評価を受けていて、英語で MBA が学べるとして大陸中国からの留学生で賑わっている模様。数十年前は中国語を学ぶことで閉ざされた大陸中国へのアプローチをめざしてソ連を含め欧米の留学生が多数いた学び舎が、今では英語で欧米人のステータスシンボリックな MBA 取得をめざして大陸中国からの留学生が集まる大学に変貌している。また、NTU は日本の早稲田大学とはダブルディグリー・プログラムを持っており、早大生も毎年10名程が履修している模様。2008年には付属施設の1つとして中国語を学ぶための Singapore Centre for Chinese Language（華文教研中心）が NTU 内に復活、設置されている。

最近の事情に関しては、右参照：<http://www.ntu.edu.sg/>

注²：シンガポールは地元華字紙『南洋商報』などでは同国を「星州」と表現し、通用させているのでそれに倣い、数か所「星（シン）」と略して表記。